特集 はこまち対談

Part 7

まちづくり支援センターの役割

新田 英理子（にった えりこ）氏

〈PROFILE〉

特定非営利活動法人 日本 NPO センター企画主任。
富山県高岡市生まれ。大学卒業後、民間企業の社員教育部門に勤務。96年9月に退社。環境NPOなどでの嘱託スタッフやボランティアを経験後、98年4月より日本ＮＰＯセンターの職員となる。主に交流・研修事業と相談事業を担当し、NPO 向けの講座、研修、全国大会などの企画・運営を行なっている。また、企業の社会貢献プログラムの相談やＮＰＯの運営相談の応対も行っている。ボランティアチームで進めている会員向け機関紙『ＮＰＯのひろば』の編集事務局も担っており、多様な人々の参画によって物事を創り出す喜びを大切にしている。

今回は、 日本NPOセンターの主任研究員として、 全国を飛び回りながらNPOの支援をしている新田英理子さんに、お話を伺いました。

丸藤：日本ＮＰＯセンターの役割を教えてください。

新田：活動の目的は、市民活動自体がどうやったら発展するかということと、企業や行政とのパートナーシップをつくっていこうということです。具体的に言うと、ＨＰや出版物などを使っての情報発信。団体の設立や運営に関する相談・企画協力。研修や交流のための講座とかフォーラムの企画運営。ＮＰＯをとりまく課題解決に向けた調査・研究。組織の立ち上げや運営に協力するためのファンドへのサポート。ＮＰＯや企業行政などセクターや地域を越えた分野の交流や対話の場づくり。ＮＰＯ制度や公益法人制度が監督的にならず市民の力が活かされるようなより良いものにしていくための提言、といった七つの柱で活動しています。

丸藤：まさにＮＰＯのための環境整備ですね。

新田：日本ＮＰＯセンターが言うＮＰＯとは、ＮＰＯ法人だけでなく、公益法人や財団・社団法人も含むし、任意団体も全部含んでいて、民間の立場で非営利で活動していて、今の世の中をなんらかの形で変えていきたいと思っている団体のことを呼んでいます。
その中で私が主に関係しているのは、相談にのったり多くの人を巻き込んでやるフォーラムなどの企画をしています。でも、実はスタッフが全部で５人しかいないので、なんでもやっているんですよ。(笑)

丸藤：２００３年には、北海道でＮＰＯ全国フォーラムを開催しましたね。

新田：全道のＮＰＯの人に集まってもらい、全国から人が来るフォーラムを行いました。その時のテーマ「地域をこえ、分野をこえ、セクターをこえ」は、日本ＮＰＯセンターの設立当初か

らのキーワードでもあります。

丸藤：私も、当時ＮＰＯをまったく知らなかったのに実行委員として参加していました。気がつくと、今つながりがある人の多くは、その時知り合っていたんです。

新田：北海道のＮＰＯって開拓精神があって、しがらみなく団体が作られる点は都会的だなと思います。新しいものを取り入れたり、人がつながっていて気さくに紹介してくれるなど、フットワークが良い印象がありますね。

丸藤：新田さん自身がＮＰＯに興味を持たれた切掛けはなんですか？

新田：直接的には、大学時代にタイに行ったことです。日本がこんなに豊かなのに、なぜタイにはスラムがあるのだろうと疑問に思い、実際に見に行きました。そこで支援をしている人は政府とか国連とか役人とかとなんの関係もなく、もの凄く自然体で助けたいから助けるんだという気持ちでやっていること、そういうのをＮＧＯと言うんだと知ったんです。で、いつかはその世界に行きたいなと思っていたのですが、でも食べられそうもないし（笑）まだ助けるパワーもないなと思って普通の企業に勤めたんです。しかし、企業の方針に共感できなくて・・・。私には何かに物凄く特化した当事者というものは無いので、日本ＮＰＯセンターのように支援するようなところが働きやすいのだと思います。

丸藤：最近のＮＰＯの課題は？

新田：団体のことでいうと、今、ＮＰＯというのは物凄く幅が出て来たので、単に法人格を持っているからといってＮＰＯと言っていいのかという疑問も出てきています。一番大事な、社会を変えたいという思いで共感を得るとかがなくて、自分のやりたいことだけやってればいいという団体があることが残念です。

丸藤：ＮＰＯがスキルアップしていくためには、何が必要でしょうか？

新田：団体として活動の幅を広げていきたいというのであれば、団体の予算の３分の１程度の額の助成金の獲得にチャレンジしてみてはどうでしょうか。助成金というのは、団体を維持するお金じゃなくて新しい取り組みに対して出されるお金です。全国には様々な助成金がありますし、北海道にはＮＰＯバンクもあります。お金を借りて返すぞ、くらいの意気込みでチャレンジしてもいいと思います。それと、中長期的なビジョンの議論も必要です。会議の時に目の前の事業の話しばかりするのではなく、組織としてどうありたいか、将来の団体の姿はどうしたいのかをきちんと話していないと思いには到達できません。やりたいミッションはあっても、組織としてのイメージがない団体がけっこう多いんですよね。

丸藤：全国のまちづくりセンターや支援センターを見てきていると思いますが、アドバイスをお願いします。

新田：丸藤さんは、フットワーカーやネットワーカーとして絶対に外に出るべきです。現場をたくさん見て体験しなきゃ支援なんてできませんし、全国を見て来て、そこで得たものをセンターに活かすというのがなきゃ支援にはなりません。それを実現させるために、外に出るスタッフと施設を守るスタッフがいるような制度設計が必要ですよね。外に出ることは、本当に大切なことです。

それから、行政などとの対話をしていくことですね。

丸藤：その手始めとして、日本ＮＰＯセンターが行っている研修に参加したいですね。

新田：ぜひぜひ、お待ちしています。（笑）

＜聞き手＞
函館市地域交流まちづくりセンター長

丸藤競